

## 安全対策リスト作成に対する提案

- 1 この書類は、事故を起こさないための安全対策についてのチェックリストとして作成しています。
- 2 安全の確保は運営スタッフの努力だけでなく、選手の自覚や周囲(地域社会)の協力も必要です。
- 3 大会の規模や参加者のレベルに応じて、対応項目の中から必要なものをピックアップし、安全対策の目安としてください。
- 4 このリストは、主に高校生や大学生を対象にして作成していますから、対象が異なる場合には見直しや項目の追加を行って下さい。
- 5 緊急時にマニュアルを読んでいる時間はありません。常日頃から、いかに注意して対応しているかが大切で、そのためのチェックリストと考えて下さい。

より重要度が高いと判断される項目を7つ選択し、印を摘要欄につけています。

### A レース前に対応すべき事項

対 応 項 目	分類	摘要
参加選手のレベルを揃えるために、参加資格に追加要件を加えることも有効な手段	SI	
出艇、帰着申告は、選手の安全管理システムであり、帆走指示書でPTP等のペナルティーを明示し、選手の自覚を促すことが効果的	SI	
経験不足の選手の参加が予想される場合は、季節等を考慮してレース委員会による強制救助があることを帆走指示書で規定する	SI	
レース公示でパウライン、アンカーとアンカーロープを義務づけることも有効な対策	SI	
レース公示で救助要請の合図のためのホイッスルの携帯を義務づけることも有効な手段	SI	
選手からの緊急時の救助要請の合図をスキッパーズミーティングで決めておくこと効果的 (例えば手を広げて横に振る、または笛を吹けば救助要請)	情報	
(日頃から) 地元漁協との情報交換は大切	情報	
参加選手のレベルの把握は、レース中止判断の要素の一つ	情報	
参加選手のレベルの把握が、安全確保の大事なファクター	情報	
天気予報を確認し、その後も時間経過に伴う状況変化に常に気を配ること	情報	
スタッフは、心肺蘇生法の講習を受講しておくことが望ましい	情報	
支援艇にも、要請した場合、救助活動してもらえるよう事前をお願いし、その際(要請時)のサインを決めておくこと効果的	情報	
万が一に備え、緊急連絡表を事前に作成し、共通情報としておくこと	情報	
各運営艇に、最低でもシーナイフは配備すること	備品	
レスキューボートには、常に予備のアンカーと長め(水深の2倍以上)のアンカーロープを備え、沈艇のアンカーリングや曳航に備えること	備品	
デスマストや不測の事態に備えて、レスキューボートにワイヤーカッターを備えておくこと	備品	

さらに、救助母船にも追加のアンカーやブイ、アンカーロープ、ワイヤーカッターを配備しておくこと	備品	
荒天が予測されている場合には、係留用のアンカーとブイを事前に海面に設置することも考慮すること	備品	
万が一に備えて、人工呼吸補助器具(QQジョイント等)をレスキューボートに備えておくこと慌てずに人工呼吸ができて効果的	備品	
乗員を救助するとき、備え付けのライフリングを使用すると救助がスムーズ	備品	
低体温に備えて、濡れた衣類を脱いで包まる毛布やタオルがレスキューボートにあると効果的	備品	
参加艇数と参加選手のレベルを勘案して運営艇数を確保すること	運営艇	
レスキューボートは、極力ハードボトムのゴムボートを配備すること	運営艇	
運営艇には予備艇の手配を行っておくこと	運営艇	
大きな大会では、救助母船を準備すると、応急手当や人命確保に効果的	運営艇	
日頃から運営艇のチェックを怠らないこと（海上での修理は不可能に近い）	運営艇	
レスキューボートのドライバーは、そのレスキューボートの特性に詳しいスタッフとすること	運営艇	
また同時に、レスキューボートのスタッフは、そのレース艇の特性にも詳しい者が望ましい	運営艇	
レスキューボートの乗員は、2名以上の必要最小限とすること	運営艇	
救助活動の邪魔になるので、レスキューボートには絶対に部外者は乗せないこと	運営艇	
多少値段が高くても、マンガン電池よりもアルカリ電池を使うこと	無線	
レース委員長の周囲には、運営のチャンネル専用1台、救助のチャンネル専用1台、計2台を準備すると効果的	無線	
突然の降雨、スプレー、落水に備え、晴れていても、無線は雨仕様の防水対策	無線	
出来れば通信経路は、無線と携帯電話のように2系統を確保	無線	
万が一に備えて、陸上に基地局を配置し、常時、無線を傍受すること	無線	
主催者責任として、JSAFが推奨する主催者保険や傷害保険に加入すること	保険	

## 留意点

- 1 レース中に対応すべき事項は、救助担当者の経験の度合いや救助艇の能力、現場の状況により違いが生じます。
- 2 特に地域の水面状況(内海か外洋か湖沼か、波浪、うねり、潮流、障害物 etc)は千差万別ですから、フリーのコースでのプロパーコースのように、最善と思われる行動にもバリエーションが生じてきます。

より重要度が高いと判断される項目を7つ選択し、印を摘要欄につけています。

## B レース中に対応すべき事項

対 応 項 目	分類	摘要
救助した艇の選手名、セールナンバーは必ず控えておき、レース委員会に知らせること	情報	
大会開始後は、インターネット等で気象予報を継続的に入手すること	情報	
周囲の沈艇の位置や経過時間を把握するためのメモをできれば取っておくこと	情報	
曳航作業に入る際には、必ずその旨を救助責任者へ告げること	情報	
ひやりとした状況があった場合には、必ずメモをしておき、責任者へ報告すること	情報	
レース進行の妨げになることがあるので、救助系統の無線チャンネルは、運営系統のチャンネルとは別にしておくこと	無線	
海上での情報伝達は無線が命	無線	
素人ほど、他艇の無線交信に無頓着なので注意	無線	
電池の交換は早めに行うこと。相手の声が聞こえていても送信されないことがある	無線	
定期的なオールエリアでの無線コールは、早期に無線不良を察知できる	無線	
各運営スタッフは、自分のポジションに関係しないことでも、無線傍受を欠かさないこと	無線	
早期にレスキューされた艇のために、予め大きめのアンカーとブイを海面に設置しておくことと便利	運営	
漁船タイプの船でレスキューする際には、ゴムボートとペアーで対応すると効果的	運営	
風が上がるのが予想される場合は、フリーのコースをあまりタイトにしないこと	運営	
艇種によっては事前に帆走指示書に明示したうえで、ランニングを避けたコース指示を行うこと	運営	
レース中止の際には、できるだけレース艇を分散させないこと	運営	
フリートをガードする運営艇は風下に配置するが、指示を出す艇は風上に位置しないとレース艇に声が届かない	運営	

船舶の往来が多い海面においては、無風の場合を想定し、曳航によりレース艇を出艇若しくは帰着させる体制を備えること	運営	
無風時で潮流が早い場合には、アンカーリング等によりレース艇の分散を防ぎ、併せてプレジャーボート等からの安全を確保することも検討すること	運営	
ハーバーバックの際には、必ず運営艇を伴走させること	運営	
パワーが小さいゴムボートでの曳航は避ける方が無難	運営	
救助艇の要員は、常に飛び込める態勢で乗船すること	沈処理	
沈艇を発見したら、必ず競技者(全員)の姿を確認するまでは、目を離さないこと	沈処理	
競技者の姿(頭)が確認できないときは、必ず接近して安全を確認すること	沈処理	
風上からの救助は、レスキュー艇からの声が選手に届きやすい	沈処理	
体力が低下している選手は、早めにレスキュー艇に引き上げて交替させた方が救助はスムーズ	沈処理	
1艇の救助に長時間手を取られないこと	沈処理	
沈処理に飛び込む際には出来る限り命綱をつけ、二次災害を防ぐこと	沈処理	
強風で起きにくい場合は、フォーステータマストにラインを取りスローでゴー・アスターンし、沈艇を風に立てると起きやすくなる	沈処理	
救助活動の間も出来るだけ周囲に注意を払い、危険に瀕している艇がないか注意しておくこと	沈処理	
次のレスキューに向かう時は、沈艇をアンカーリングすることも得策	沈処理	
再帆走に時間がかかりそうな場合は、レース艇をアンカーリングし選手をレスキュー艇に引き上げることも効果的	沈処理	
アンカーリングの際には艇体の破損等を確認し、エアータンク内への浸水等による沈没の危険性のないことを確認しておくこと(二次被害の防止)	沈処理	
一過性の強風時には無理に起こさず、強い風をやり過ごす方が安全	沈処理	
沈した時刻と場所をメモすると、経過時間の把握や危険予知が容易になる	沈処理	
うねりのある海面では、沈艇へのアプローチは風下からが原則	操船	
うねりの少ない海面では、風上からアプローチし少しずつ後進をかけながら常にバウを風下にする、救助艇の位置取りが容易(特に軽量で船長の長い艇)	操船	
選手とプロペラの位置に注意し、出来るだけペラを選手に近づけないこと	操船	
バウラインや曳航索がペラにかからないように操船すること	操船	

2003年5月14日 修正  
2003年11月29日 委員会確認